



VIVID audio

GIYA S2 Series

designed by Laurence Dickie

S2 Series

GIYA第2世代S2シリーズの誕生

VIVID audio (ビビッド・オーディオ)のチーフエンジニアであるローレンス・ディッキーは、共鳴と共振を徹底的に排除するためのさまざまなテクノロジーの到達点として GIYA シリーズを完成させました。その初代モデルである GIYA G1 の完成からはや8年。未だ他のスピーカーの追従を許さず、最先端スピーカーとしての地位を不動のものとしている GIYA シリーズ。ディッキーは G1 の完成後も研究開発の手を休めることなく新たなアイデアの実用化に向けて努力を続け、その成果として新たなフラッグシップモデル GIYA G1 SPIRIT を完成させました。この GIYA G1 SPIRIT のテクノロジーを従来の GIYA シリーズに採用したものが GIYA シリーズの第2世代 "GIYA S2 シリーズ"です。

G1 SPIRIT で開発したツイーターとミッドレンジドライバーの拡散性を高めるディフューザー、内部ブレーシングにはカーボンファイバーコンポジットを採用し、クロスオーバー周りの回路レイアウトを一新。外観デザインやドライバー構成などは既に完成されており、一切の変更を加える必要がありません。

VIVID AUDIO の到達点をさらなる高みへと昇華させた GIYA S2 シリーズのサウンドをお楽しみください。

新開発ツイーター & ミッドレンジによる均一な音響拡散性

GIYA S2 シリーズの特徴的な外観デザインはまったく変わりません。ウーファーにアブソーバチューブを採用し、音響的な理想を追求したエンクロージャーデザインは究極の完成形であり、変更の必要性はまったくありません。唯一、外観で変わった部分はツイーターとミッドレンジに装着されたディフューザーです。これこそが、GIYA第2世代を象徴する新たなテクノロジーです。

ディッキーは全周波数帯域にわたる音響特性をさらに均一にすることが正確な音場再現性を飛躍的に高めることを発見。

指向性にクセの出やすい中高域の拡散特性を向上させるための新しいアイデアが、ツイーターとミッドレンジのディフューザーです。

気の遠くなるようなコンピューターシミュレーションと、数十回にわたる試作の結果得られた最適形状のディフューザーにより、ダイヤフラムにかかるロードを厳密にコントロール。拡散特性の大幅な改善を実現させました。



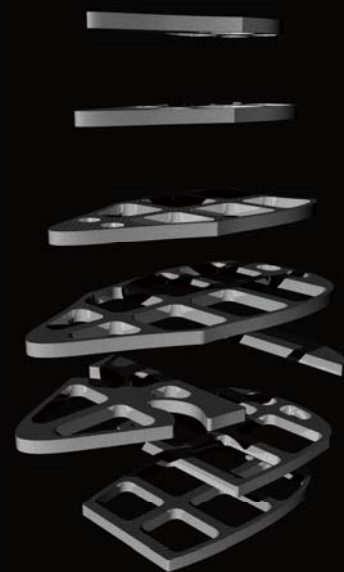
新規設計ディフューザー付き
D26-S Tweeter と D50-S Mid-Range

キャビネット剛性を高める内部ブレーシング材

エンクロージャーの構造的なパフォーマンスを維持しつつコンポーネントの質量を軽減させるため、エンクロージャー内のブレーシング材にCNCマシンで加工された強靱なサンドイッチ構造カーボンファイバーコンポジットを採用いたしました。

クロスオーバーネットワーク回路を一新

エンクロージャー内部に発生する電磁気の流れをコンピューターシミュレーションすることにより、回路レイアウトを最適化。制振性に優れた頑丈な基板上に回路をマウントすることにより、電磁気と振動による外乱の影響を最小限にしています。



カーボンファイバーコンポジットによる内部ブレーシング

GIYA G1 SPIRIT

完璧へのあくなき探究の成果

GIYA第2世代を象徴するフラッグシップモデル GIYA G1 SPIRIT

従来のトップエンドであった GIYA G1 以上の上を目指す必要があるのだろうか。そう思わずにはいられない人も少なくはないでしょう。既に完成されているもののさらに上を目指すということは VIVID AUDIO の目標とする基準が非常に高く設定されているからというだけではありません。

VIVID audio を突き動かしているのは情熱と理念です。さらなる高みを目指す必要があるのならどんなに小さなことでも挑戦、追及せずにはいられないのです。

新開発ウーファーC225-100

従来のC225をさらに高性能化したC225-100を新規設計。ボイスコイルの口径を従来の75 mmから100 mmへと大幅にアップ。放熱効率と許容入力とは従来から2倍に増加するとともに、大振幅時においてもリニアで制動力のあるパワフルな低域表現を可能にしました。



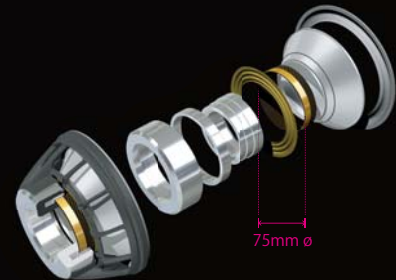
低中音域C125-75s Mid Bass ドライバー

・大口徑の75 mm ボイスコイル

新規設計のC125-75sでは、75 mm 口径のボイスコイルを採用。大型化された磁気回路と相まってドライブ能力が飛躍的に向上しました。ショートボイルコイルシステムによる制動の効いたドライブ力と十分に拡大されたリニアな周波数帯域により従来から十分に抑えられていた高調波歪がさらに低減しています。

・カーボンファイバーリング

Mid-RangeドライバーD50と同様のカーボンファイバーリングをダイヤフラム外周に装着するアイデアを着想。このカーボンファイバーリングにより、ブレイクアップ周波数が4.3 kHzから10.5kHzへと劇的に向上いたしました。



拡散性に有効な新開発ディフューザーをツイーターとミッドレンジに装備

中高域の拡散特性をさらに向上させるためにコンピューターシミュレーションにより最適化したディフューザーをD50 Mid-RangeとD26 Tweeterに装備。位相特性に優れ、より正確な空間再現能力を発揮します。



エンクロージャーの外部に独立させたクロスオーバー回路

エンクロージャー内部に組み込んでいたクロスオーバー回路を外部接続タイプに変更。

ドライバー自身が発生する振動や風圧、マグネットシステムが発生する磁力といった外乱の影響を排除し、S/N比の向上に大きく貢献しています。

各ドライバーの能力を最適化するエンクロージャー

低域のポテンシャルを最大限を引き出すための振動板口径とエンクロージャー内容積の関係は計算により厳密に導き出されます。G1 SPIRIT はウーファーのシャーシが大型化されたのに合わせてエンクロージャーの幅が G1 よりも増加しており、容積のバランスを保つためにグラマラスなプロポーションとなりましたが、これは外観デザインを優先した結果ではなく、音響的な最適値を追及した結果なのです。

また、内部ブレーシングの材質にはCNCマシンで加工された強靱なサンドイッチ構造のカーボンファイバーコンポジットを採用。構造的なパフォーマンスを維持しつつ、コンポーネントの質量の軽減を実現しました。

ウーファーのキャビネットを構成するアブソーバー・チューブ



GIYAシリーズが纏う特徴的なフォルムは、ウーファーにアブソーバー・チューブを採用していることに由来しています。ドライバーユニットは原理的に、外に放出する音響エネルギーと同じ量のエネルギーをキャビネットの内部にも放出しています。特に低音部を担当しているウーファーともなると莫大なエネルギーをキャビネット内部に放出しており、このエネルギーがスピーカーキャビネットを「共振」させてしまうのです。

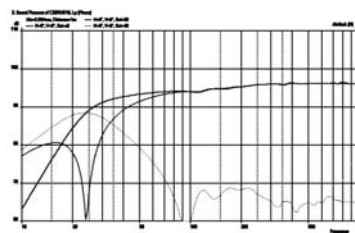
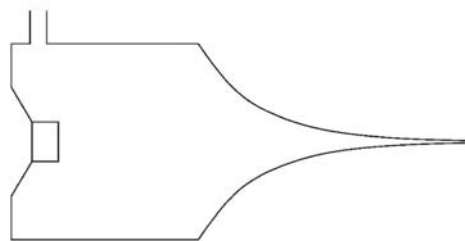
アブソーバー・チューブは、チーフエンジニアであるローレンス・ディッキーがB&W社在籍時代に開発した彼オリジナルのアイデアで、キャビネット内部に放出されたエネルギーを効率よく自然に減衰させるための極めて優れた手法ですが、ウーファーのキャビネットにアブソーバー・チューブを採用したのは、GIYAシリーズが完成する以前にはディッキーがB&W社で完成させたオリジナル・ノーチラスのみでした。これはキャビネットをテーパチューブ状に形作ることが大変な困難を伴うために、ディッキーが去った後のB&W社では技術的に実現が不可能になってしまったからに他ありません。

GIYAの技術的な核心部分は、ウーファーにアブソーバー・チューブを採用したこと。またアブソーバー・チューブとパスレフを組み合わせることで、アブソーバー・チューブの効果を落とすことなくチューブの小型化を実現させたところ。このことによりキャビネットの共振が皆無な透明でパワフルなサウンドが得られたのです。

アブソーバー・チューブとパスレフ方式の両立

B&W 時代に開発した「オリジナル・ノーチラス」スピーカーは、アブソーバー・チューブを使用した革命的なスピーカー・システムでしたが、致命的とも言える欠点がありました。それは、ウーファーの音圧レベルが他のドライバーユニットに比べて著しく低かったことです。この致命的な欠点のために、オリジナル・ノーチラスは一台のアンプで使用することができず、専用のアクティブクロスオーバーを介してマルチアンプ方式とせざるを得ませんでした。専用アクティブクロスオーバーのウーファー回路にゲインを持たせて、他のドライバーの音圧レベルに揃えたわけ。このことにより、ウーファーのダイナミックレンジに制限が加わってしまったことが更なる欠点としてあげられます。

ディッキーは、ウーファーにアブソーバー・チューブを適用させるにあたり、オリジナル・ノーチラスの欠点を克服する必要がありました。ウーファーの音圧レベルを確保して十分なダイナミックレンジを得ること、しかもアブソーバー・チューブを動作させること。このある意味相反する二つの目標を実現するディッキーのアイデアは、アブソーバー・チューブにパスレフ方式を組み合わせることでした。このアイデアは当初、なかなかうまく行きませんでした。度重なる実験の結果、アブソーバー・チューブのカットオフ周波数とパスレフポートの共振周波数をうまく設定することにより十分動作することを発見し実用化に成功。GIYAシリーズでは、十分に豊かなエネルギーと、アブソーバー・チューブによる共鳴・共振の無い透明なベースサウンドを見事に両立しています。



シミュレーションモデル

すべてのドライバーユニットはディッキーの設計により完全内製化

GIYAシリーズをはじめとする VIVID audio のすべてのドライバーユニットはディッキー自身が設計し内製化。ドライバーユニットを自社製造しているスピーカーブランドは数あれども、スピーカーシステムをまとめあげるエンジニアが自らドライバーユニットを設計する例は他社にはありません。ディッキーが自らドライバーユニットを設計するということは、システムの完成形を頭に思い浮かべながらドライバーユニットを設計できるということです。システムの特性を完全に把握してそれに合わせてドライバーの設計を微妙にアジャストすることができるのが、VIVID audio のサウンドの完成度の高さの秘密です。

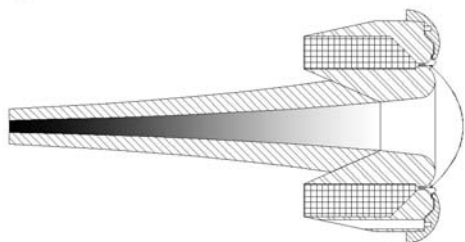


すべてのドライバーユニットに同一素材のダイヤフラムを採用

ディッキーは、ツイーターからウーファーまでのすべてのドライバーユニットに同一の振動板素材を使用することにこだわっています。振動板の素材が異なると、当然素材の持っている物性も異なり、音響的には音速の違いとなって現れます。この音速の違いが、サウンドのクセを生み出してしまいうから。ツイーターからウーファーまですべての帯域で使用できる振動板素材は実はそれほど多くありません。他ブランドでツイーターに使用されているダイヤモンド振動板ではウーファーを作ることには不可能です。ウーファーやミッドベースに使用されるケブラー繊維ではツイーターは作れません。

ディッキーにとって理想の振動板素材はアルミ合金でした。アルミ合金であればウーファーにもツイーターにも使用でき、すべての帯域で素材を揃えることができます。同一素材を全帯域で使用することにより、全帯域にわたるサウンドのクセが生じず、あたかも超ワイドレンジなフルレンジスピーカーが鳴っているようなサウンドの一体感を得ることができるのです。

独特のカテナリーカーブを持つドームツイーターD26とミッドレンジ D50



アルミ合金はツイーターやミッドレンジといった高域用のドライバーに使用するには、素材が柔らかく硬度がやや足りないところがウイークポイントとなり、高域特性を伸ばすことが難しいことは事実です。ディッキーはアルミ素材の硬度不足をカバーするために、高域用ドライバーにおいてドーム形状をコンピューターシミュレーションを利用して解析、ドーム断面形状がカテナリーカーブ（懸垂曲線）を描く形状とすることで最大の強度を得ることができることを発見し、D26ツイーターとD50ミッドレンジに採用いたしました。この独特のドーム形状により、アルミ振動板では従来あり得なかったほどに高域特性を伸ばすことに成功。

すべてのドライバーユニットにネオジウムを使用した独自のラジアル(放射型)構造磁気回路を採用

ドライバー背面の磁気回路は空気の動きを最大限スムーズにするためにできるだけコンパクトにすることが望ましいですが、十分な磁力を得ようとするとマグネットはどんどん巨大化していき空気の動きにまで気を配ることがなかなかできないのがドライバー設計の現実です。ディッキーはこのジレンマを画期的な磁気回路構造により解決し、磁気回路のコンパクト化と強力な磁力を見事両立しています。

また十分強力な磁束を発生することにより、すべてのドライバーユニットでボイスコイルが磁束ギャップ内に完全に収まるショートボイス方式を採用しており、このことがディストーション特性の向上に大きく役立っています。



4 way Speakers

すべてのドライバーユニットには十分に広大な周波数帯域をカバーできる能力を持たせる。その上で、周波数帯域の中のごく一部分、本当に良いところのみを使用するために、GIYAシリーズは4ウェイを採用しました。

音楽信号の周波数帯域を 20 Hz ~ 20,000 Hz と考えると、これはおおよそ9オクターブのレンジとなりますが、ディッキーはこれを4分割することを最適と考えています。ミッドレンジとミッドベースにそれぞれ2オクターブずつ受け持たせ、ツイーターとウーファーにはそれぞれ2.5オクターブずつ割り振ります。GIYAシリーズのクロスオーバー周波数は、G1からG3までは共通で220 / 880 / 3,500 Hz であり、G4は250 / 1,000 / 4,000 Hz ですが、すべてのドライバーユニットは、使用帯域よりも

遙かに広大な周波数帯域を持っています。クロスオーバー回路はもちろんディッキー自身の手による設計です。ディッキーはGIYAシリーズの周波数特性を低域から高域までが全くのフラットになるようには設計していません。彼の長年の経験により、高域に向かって若干レベルを下げた設計としていますが、これは、実際の家で使用した際にその方が聴感上、よりフラットに聴こえるからです。

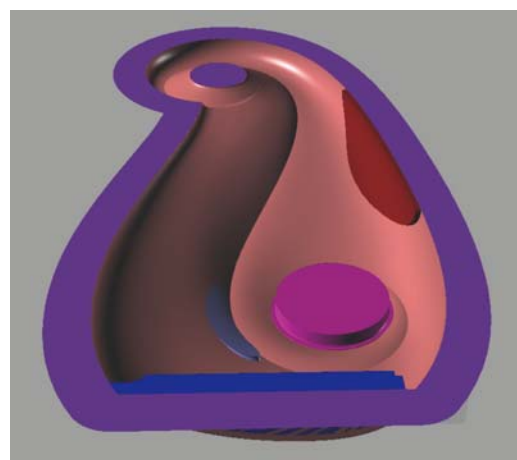
エッジが存在しない3次元曲面で形作られたキャビネット

GIYAシリーズを形作るキャビネットの素材には、航空宇宙産業で使用される軽量かつ極めて強靱な特殊グラスファイバー強化樹脂を使用しています。軽量のバルサ繊維をコアとし、グラスファイバー強化樹脂でサンドイッチする独自の三層構造とすることで十分な強度を保ちつつ軽量化を果たしています。

後述する「リアクション・キャンセル・マウント」方式によりウーファーのエネルギーはキャビネットに全く影響を及ぼしません。他ブランドのスピーカーでは、ウーファーのエネルギーに負けないように強固な重量級のキャビネットを必要としますが、この「リアクション・キャンセル・マウント」により、VIVID audio のスピーカーは重いキャビネットを必要としません。これは VIVID audio の大いなるアドバンテージです。このテクノロジーのおかげで、軽量の樹脂成型でのキャビネット製作が可能になりました。加えて、この樹脂成型により、キャビネット形状を3次元的な曲面で構成させることも可能にいたしました。スピーカーシステムの基礎となる音響理論は、昔も今も変わっていません。スピーカーを形作るキャビネットに角やエッジが存在すると、その部分から音響エネルギーが放散され

(二次音源)、ドライバーユニットからの一次音源と相互作用を起こし、サウンドにキャラクターを付けたり、サウンドステージを損ねたりすることは昔からよく知られた事実です。3次元曲面のキャビネットは音響的に優れていることは従来から知られていることですが、木材(ウッド)や金属などの従来のキャビネット材料では、実現させることがほぼ不可能なことでした。

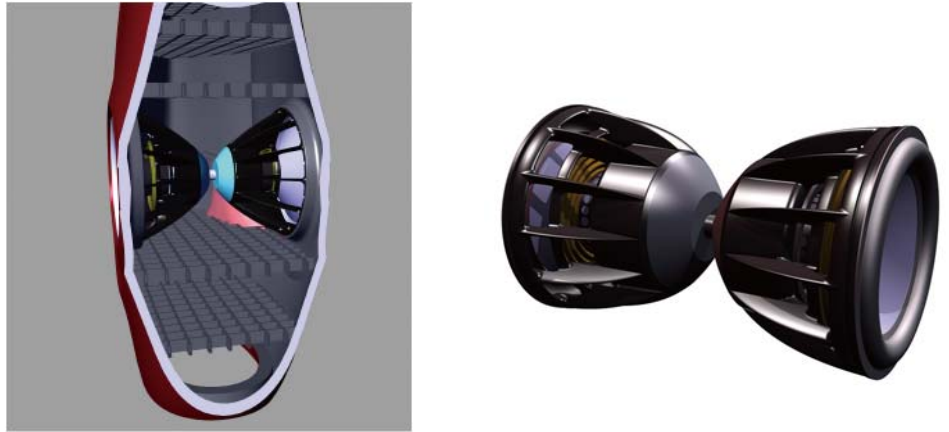
GIYAシリーズの類いまれなサウンドステージ再現能力は、まさにこの3次元曲面構成のキャビネットの賜物です。ディッキーは、アブソバー・チューブとしての動作を完全なものとして、さらにスムーズな音響拡散に最適なキャビネット形状を、最新のコンピューター解析によりシミュレーション。すべての音響特性を満足させる結果としてGIYAシリーズの特徴的なフォルムが完成したのです。



キャビネットにエネルギーを伝えない「リアクション・キャンセル・マウント」

低音部を担当するウーファーは、大きな音響エネルギーを放出させるために莫大な力で駆動されますが、ウーファーが動けば動くだけ反作用力でキャビネットに同じだけの力がかかります。金属製のキャビネットを採用した重量級スピーカーなどは、まさにこのウーファーの反作用力に耐えうるキャビネットを作ろうとした結果ですが、設計者ディッキーは、キャビネットに重量と強度を必要としない画期的な方式を開発しました。

「リアクション・キャンセル・マウント」と名付けられたこの画期的な方式は、二つのウーファードライバーを背中合わせに配置して両者を金属製の頑丈な支柱で連結するというものです。それぞれのウーファーの反作用力はもう一方のドライバーの反作用力で打ち打ち消し合うために、ウーファーが動くことによる反作用力がキャビネットに影響を与えることはありません。この優れた方式のために、キャビネットを軽量な樹脂で造ることが可能になり、また樹脂製のキャビネットだからこそアブソバー・チューブのような曲面構成のキャビネットが実現できたのです。



パールホワイト

全モデル共通
スタンダードカラー



ピアノブラック

全モデル共通
スタンダードカラー



フェラーリエロー

GIYA G1 SPIRIT
スタンダードカラー



ボローロレッド

GIYA G1 - S2
スタンダードカラー



ダッチブルー

GIYA G2 - S2
スタンダードカラー



モナークパープル

GIYA G3 - S2
スタンダードカラー



シリオブルー

GIYA G4 - S2
スタンダードカラー

WBT 製 バイワイヤリング対応スピーカー端子

すべての GIYA シリーズは、底面にスピーカー端子を備えています。スピード端子もしくはバナナ端子で接続可能です。シングルワイヤ用にジャンパー線を付属していますが、バイワイヤリングで接続されることをお奨めいたします。

High 用スピーカー端子は、ツイーター/ミッドレンジ/ミッドベースにつながり、Low 用スピーカー端子はウーファーにつながります。もしシングルワイヤリングで接続される場合は、スピーカーケーブルを High 側に接続し、付属ジャンパー線を使用して Low 側を接続してください。

スパイクによる 6 点支持

すべての GIYA シリーズは、付属のスパイクを使用することを前提にしています。一本あたり 6 個のスパイクで支持され安定感は抜群です。

カラーバリエーション

すべての GIYA シリーズの仕上げは、自動車と同じ塗装工程により外観仕上げを行います。各モデルにはスタンダードカラーが設定されていますが、特別色をオーダーいただくことも可能です(色サンプルをご用意ください)

各モデルのスタンダードカラー設定は次のとおりです

GIYA G1 SPIRIT	パールホワイト / ピアノブラック / フェラーリエロー
GIYA G1 - S2	パールホワイト / ピアノブラック / ボローロレッド
GIYA G2 - S2	パールホワイト / ピアノブラック / ダッチブルー
GIYA G3 - S2	パールホワイト / ピアノブラック / モナークパープル
GIYA G4 - S2	パールホワイト / ピアノブラック / シリオブルー

標準は光沢仕上げですが、すべてのカラーでマット(ツヤ消し)仕上げも合わせて選択できます

SPECIFICATION

GIYA G1 SPIRIT



ドライバーユニット

D26 - S Tweeter
D50 - S Mid-Range
C125 - 75s Mid-Bass
C225 - 100 Woofer x 2
92dB @ 2.83V rms / 1m
6Ω nominal / 3Ω minimum
25 - 36,000 Hz @ -6dB
44,000 Hz
< 0.3 %
220 / 880 / 3,500 Hz
1,600 W
1,600(H) x 440(W) x 820(D), 80kg
130(H) x 285(W) x 410(D), 8 kg
フェラーリエイロー / ピアノブラック / パールホワイト

能率
インピーダンス
周波数帯域
ツイーターブレイクアップ周波数
全高調波歪率
クロスオーバー周波数
最大許容入力
製品寸法・重量
外部ネットワーク寸法・重量
スタンダードカラー

GIYA G1 - S2



ドライバーユニット

D26 - S Tweeter
D50 - S Mid-Range
C125s Mid-Bass
C225 Woofer x 2
91dB @ 2.83V rms / 1m
6Ω nominal / 4Ω minimum
25 - 36,000 Hz @ -6dB
44,000 Hz
< 0.5 %
220 / 880 / 3,500 Hz
800 W
1,700(H) x 440(W) x 800(D), 75kg
ボローロレッド / ピアノブラック / パールホワイト

能率
インピーダンス
周波数帯域
ツイーターブレイクアップ周波数
全高調波歪率
クロスオーバー周波数
最大許容入力
製品寸法・重量
スタンダードカラー

GIYA G2 - S2



ドライバーユニット

D26 - S Tweeter
D50 - S Mid-Range
C125s Mid-Bass
C175 Woofer x 2
89dB @ 2.83V rms / 1m
6Ω nominal / 4Ω minimum
29 - 36,000 Hz @ -6dB
44,000 Hz
< 0.5 %
220 / 880 / 3,500 Hz
800 W
1,383(H) x 360(W) x 638(D), 55kg
ダッチブルー / ピアノブラック / パールホワイト

能率
インピーダンス
周波数帯域
ツイーターブレイクアップ周波数
全高調波歪率
クロスオーバー周波数
最大許容入力
製品寸法・重量
スタンダードカラー

GIYA G3 - S2



ドライバーユニット

D26 - S Tweeter
D50 - S Mid-Range
C125s Mid-Bass
C135 Woofer x 2
87dB @ 2.83V rms / 1m
6Ω nominal / 4Ω minimum
33 - 36,000 Hz @ -6dB
44,000 Hz
< 0.5 %
220 / 880 / 3,500 Hz
800 W
1,161(H) x 341(W) x 578(D), 40kg
モナークパープル / ピアノブラック / パールホワイト

能率
インピーダンス
周波数帯域
ツイーターブレイクアップ周波数
全高調波歪率
クロスオーバー周波数
最大許容入力
製品寸法・重量
スタンダードカラー

GIYA G4 - S2



ドライバーユニット

D26 - S Tweeter
D50 - S Mid-Range
C100s Mid-Bass
C125L Woofer x 2
86dB @ 2.83V rms / 1m
6Ω nominal / 4Ω minimum
36 - 36,000 Hz @ -6dB
44,000 Hz
< 0.5 %
250 / 1,000 / 4,000 Hz
400 W
1,011(H) x 300(W) x 460(D), 32kg
シリオフィュー / ピアノブラック / パールホワイト

能率
インピーダンス
周波数帯域
ツイーターブレイクアップ周波数
全高調波歪率
クロスオーバー周波数
最大許容入力
製品寸法・重量
スタンダードカラー

鬼才 ローレンス・ディッキーが挑む 現代スピーカーの究極

VIVID audio (ビビッド・オーディオ)のチーフエンジニア、ローレンス・ディッキーの設計思想は彼の長いキャリアの中で常に一貫しています。その思想とは、スピーカーに発生するあらゆる「共鳴」と「共振」を徹底的に排除すること。

彼はその命題に対して、常に時代の最新のテクノロジーをもって挑み続け、ひとつの到達点として GIYA シリーズを完成させました。

フラッグシップモデル G1 SPIRIT を筆頭に、もっとも小型の最新モデル G4 まで全てのモデルにおいて、共通したテクノロジーを根底に、キャビネットからクロスオーバーネットワーク、ドライバーユニットの設計を含むすべてのエンジニアリングをディッキーが担当し、すべての妥協を排して彼の理想を追求した GIYA シリーズは、現代スピーカーのひとつの究極の姿であることは疑う余地もありません。



GIYA (ギヤ) とは

GIYA (ギヤ)とは、南アフリカに住むズールー族のダンスの名前です。宙を軽やかに舞う自由な躍動感溢れるリズムと、草原を渡るたおやかな風の揺らぎをイメージして、ローレンス・ディッキーは自らの最高傑作に GIYA という名を冠しました。遙か遠くの空にわずかに聴こえる鳥のささやきから、大地を震わせるアフリカドラムの強靱なサウンドまで、ナチュラルで透明なワイドレンジサウンドで音楽表現の真髄に迫るスピーカーシステム。それが VIVID Audio の GIYA シリーズです。

VIVID Audio ショートストーリー

HISTORY

1993

・ VIVID audio のチーフエンジニアである ローレンス・ディッキーは、英国のスピーカーブランド B & W で自身のスピーカー設計者としてのキャリアをスタート。当時B&W社の社長を務めていたロバート・トゥルンツ氏のもとでエポックメイキングとなるスピーカー「オリジナル・ノーチラス」を完成し脚光を浴びる。(1993年)

1996

・ この頃から、B & W 社の経営方針が変わりはじめ、社長であったトゥルンツ氏が退任し、会社の方針が開発重視から販売重視の方向に転換するのに伴い、ディッキーはB & Wを退社。(1996年)

・ プロ用スピーカーメーカーである Turbo Sound でモニタースピーカーの開発に携わる。

・ 一方で、B & W 社の社長であったトゥルンツ氏は、もともとアフリカの民族音楽に造詣が深かったことから、音楽ビジネスをアフリカで立ち上げることを決意し、南アフリカ共和国に拠点を構えた。

・ 南アフリカ共和国で音楽ビジネスを立ち上げたトゥルンツ氏は、自らのビジネスの他に、手伝いで音響コンサルタント的な仕事も引き受けていたが、その関係で、南アフリカでハイエンドオーディオ製品の輸入ビジネスに携わっていた、フィリップ・グーテンタッグ氏と知り合う。

2001

・ ローレンス・ディッキーは Turbo Sound で開発に携わりながらも、自身の理想とするスピーカーを創りたいという情熱を燃やしていた。ある時、トゥルンツ氏の紹介によりディッキーとグーテンタッグ氏が南アフリカで出会い、二人の情熱が重なり合ったことで VIVID audio が誕生した。(2001年)

Stella Inc.

株式会社 ステラ

173-0026 東京都板橋区中丸町51-10

Tel:03-3958-9333 Fax:03-3958-9322

e-info@stella-inc.com

http://www.stella-inc.com

2017.06 / 1000